

子どもの本 の現在

清水真砂子



子どもの本 の現在

清水真砂子



岩波書店

子どもの本の現在

[同時代ライブラリー 348]

1998 年 7 月 15 日 第 1 刷発行

著 者 清水真砂子

発行者 大塚 信 一

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111

同時代ライブラリー編集部 03-5210-4136

印刷製本・精興社

© Masako Shimizu 1998

ISBN 4-00-260348-2

Printed in Japan

はじめに

子どもの本の仕事を始めて、十五年ほどになる。その間、私は子どもの本をただの一度も子どもとして読んだことがない。私は十五年前にはすでに大人になっていたから（もっとも、何を称して大人と呼ぶかはいっこうにさだかでないのだが）、ずっと大人として、大人の頭と大人の心で、子どもの本を読んできた。今は、四十歳を少しこえたが、私はあいかわらず、大人として子どもの本を楽しんでいる。

「ちがう。子どもの本を楽しんできたのは、あなたの中にある子どもの部分だ」と人はいうかもしれない。なるほどそうかもしれない。だが、それだけではないような気がする。

ともあれ、私の関心事はいつも、自分にとってその本がもしろいかどうかで、「子ども」にとつてどうかなど、一度も考えてみたことがなかった。それは不可能なことだった。「大人にとつて、この小説は……」といわない人びとが、なぜ平気で、「子どもにとつて、この物語は……」というのだろう。私にはいつも、「自分にとって……」しかなかった。

そんなふうに読んでいると、気になる作家というのが浮かび上がってくる。フィリパ・ピア

ス、マヤ・ヴォイチェホフスカ、E・L・カニグズバーグ、ヴァジニア・ハミルトン……。

日本では賢治以外にだれがある、という人がある。だが、私は、今あげた作家たちがそうであるように、同時代の空気を呼吸しながら、自分よりほんの少し先を歩いている人たちが気になる。今日という時代と、彼らはどうきりむすんでいこうとしているか、それを知りたいと思う。

たとえば、おりあいのつけ方というものを考える。今を生きる作家は自分自身とどうおりあいをつけ、外の世界とどうおりあいをつけようとしているか。私たちが作品をおもしろいと感じる時、その作者の世界とのおりあいのつけ方はどうなっているか。

生理もまたおりあいの対象となるものである。私は同性の作家たちが自分の生理をどのように解放させてきたか、自らの生理とどうおりあいをつけてきたかを、少したんにみてもいいと思う。そのとき、ことばはどう変化し、どんなゆたかさを獲得していくか。生理をくぐりぬけたことばのありようもさぐりたいと思う。

さらに、また、今日において、「良心的」であるとはどういうことか、も気になるところである。「良心的」ということばが、もつともらしく聞こえる場と、まるでとんちんかんに聞こえる場とがあるのだから。

子どもの本の世界には、「子どもの本である」というただそれだけの理由で、検証を免れて

きた問題が相当ある。私は子どもの本という特殊性に目を奪われて、本質を見誤ることをおそれる。特殊性など一度思いきってうっちゃって見たほうがいい。特殊性に頼らなければやっていけないようなものなら、児童文学は古典など一冊も持ちえてはいないはずだからである。

子どもの本の現在
目次

はじめに

使命感と自己解放のあいだで……………1

石井桃子論

「あいまいさ」を引き受けて……………51

乙骨淑子論

問いを生きつづける……………85

神沢利子論

生理のゆたかさは武器になるか……………115

松谷みよ子論

現在^{いま}を見すえて……………143

上野瞭論

「良心」のいきつくところ	189
灰谷健次郎論	

方法としての軽みは可能か	225
今江祥智論	

あとがき

もうひとつのあとがき

—— 同時代ライブラリー版によせて ——

使命感と自己解放のあいだで

石井桃子論

石井桃子の最高傑作は何かと問われれば、私は迷わず、『幼ものがたり』（一九八一年）と答える。実に『幼ものがたり』こそは、ひとり石井の最高傑作となることが予想されるばかりでなく、近代以降の日本で子どもについて書かれた文学作品のおそらくは最高位に位置する一冊である。その質の高さは、たとえば中野重治の『梨の花』に比しても、けっして劣りはしないであらう。

だが、『幼ものがたり』は『梨の花』と同じように、一般に考えられる児童文学の範疇はんちゆうには入らないものである。「子どもの本の世界での貢献と業績ははかりしれないものがある」（『幼ものがたり』著者紹介）とたたえられ、評価される石井桃子が、その、おそらくは生涯の傑作となるべきものを、専門家として自らかくあるべしと考える児童文学のわくの外にのこしたという

ことは、何という皮肉であろう。（もちろん『幼ものがたり』は子どもの本の世界に今後大きな貢献をすることはたしかだが、それでも、なお、私はこれを皮肉と考える。）

私たちはこの皮肉をいつたいどう受けとめ、どう解釈すればいいのか。こういうことは、よくあることかもしれない。逆の例になるが、エリザベス・ネズビット（一八五八—一九二四、代表作『砂の妖精』）の名をイギリス児童文学史にのこしたのは、生前ネズビットが作家として名をなした主たる分野の作品ではなく、むしろ作家自身は傍系と考えていた仕事だった。現在の作家にもこういうことは起こりうるだろう。もともと他分野に比べれば、まだ歴史の浅い児童文学の分野では、石井のような例はまだまだ珍しいものではあろうけれど……。

ともあれ石井は、子どものための本の世界では十分発揮しえなかった力をこの回想記では発揮した。壮年期には示しえなかったそのゆたかな世界を七十歳を迎えて書きだしたこの『幼ものがたり』では、人びとの前にたつぷりと披露してみせた。それはどういうことを意味するのか。どのようにして起こったのか。そのへんをさぐってみたいと思う。

『幼ものがたり』ほどのすぐれた作品を生みえた石井ならば、もつと早い時期にこれと質を同じくする子どもの本が書いていてもよかった気がする。それがそうならなかったのはなぜか。『幼ものがたり』にふんだんにのぞく石井の生理のゆたかさが、なぜそれ以前の仕事にはうかがえないのか。石井にとって子どもとは結局のところ何であり、「書く」とはどういうことだ

ったのか。『幼ものがたり』は石井桃子のこれまでの仕事のありようを、あざやかに逆照射して見せてくれているように思う。

『幼ものがたり』はそのタイトルの示すとおり、浦和の北のはずれ、中仙道に面する屋敷に幼年時代を過ごした石井桃子の回想記であり、もっとも早くは一歳数カ月くらいから、遅くは小学校一年までの記憶を、というより「その記憶のかけら」を一冊の本に綴ったものである。

石井はたとえば自分にとっての明治の終りという時期を、次のようにみごとにとらえている。

明治天皇の死は、祖父の死と祖母の死の中間に来て、そのあいだに祐姉は学校に上がり、初姉は嫁いだ。昼間、家の中でぶらぶらしているのは、私ひとりになった。おとなは、みな忙しい。これは、私が祐姉の腰巾着であった身分を卒業し、まがりなりにも自分ひとりで何かをしはじめた時期であった。しかし、私は、まだ自分では、世の中へ出ていかなかった。世の中が私の前を通ったり、私の中へはいってきいたりしてただけである。ちょうどそのときが、明治の終りであった。(傍点筆者)

『幼ものがたり』に綴られた石井の幼時の記憶はきわめて個人的なものでありながら、よみがえった記憶の一片一片は石井桃子のことばにとらえられると、単なる「私」の思い出ばなし

をこえて、読み手の心とひびきあい、読み手の心のひだの奥に眠りこんでいた読み手自身の幼時の記憶をよびさます。この本を読むということは、だから、石井桃子というひとりの作家の幼時の世界に入りこむように、実はむしろ、忘れ去り、捨て去ってきた読み手自身の幼時に、その幼時を現在形で生きる自分自身に出会うことであり、その時、読み手には、見なれていたはずの世界が思いがけない新しい様相をおびて見えてくる。

幼時を現在形で生きる自分と、それに会おう今の自分と。石井はそのへんのことを、こんなふうに書いている。

もうひとつおもしろく思われるのは、いま書いたようなこと（筆者註Ⅱある夏の朝、姉と中仙道をゆき、植木鉢を見てのびやかな気分で立ったという思い出）が、私自身が内がわから外界を見たようでなく、まるでもう一人の私が、自分を外がわから見ていたように、あたりの情景もろとも、心に描けることである。

たとえば、石井は、写真をとるといっているので、母に抱かれて家じゅうのものといっしょに、カンの前に並んだ日のことをおぼえている。縁側にひとり祖母がすわっている。姉や、兄が代り番こに祖母のところについて何か話しかけている。それでも祖母は出てこない。「みんなの

仲間に入りたいのに、「影がうすくなるのがこわくて」(中略) どうしても縁側から降りてこなかった、すねたような、さびしそうな祖母のようすさえ、私は母に抱かれて、感じとっていた」と石井は書く。「感じとっていた」石井と、それを外から見ている石井と。その時、幼い石井が感じとっていたものに、今ことばを与えているのは、いうまでもなく、外から見ている石井である。

幼い石井は、また、ある日、母親と祖母との間の亀裂を一瞬に見てとっている。暮れがた、外から帰ってきた母親と桃子は、ブタの脂みを買って出てきたらしい祖母と往来でゆきあう。「ああ、おばあさん……」と声をかけようとした桃子の肩を母親は押さえる。幼い自分は母が祖母に声もかけないですれちがったことをいぶかしく思ったのだろう、と石井はいう。それでは、なければ、「あの宵の、風呂敷をまるめたようなものを片手にもった、さびしげな小さい姿を、いまになつて思いだすはすがない」からと。

そして、石井はこの章を、「いま、自分が祖母の年近くなつてみて、そのときの母と私の行いのなかに、若さのもつ残酷さを見る気がする」としめくくるのである。

さらに、また、石井は、祖父がはまぐりを焼いて食べさせてくれたことをおぼえている。そして、その「焼きはまぐり」の章をこうしめくくる。「祖父は、このようなことを私たちにしてくれるとき、いかにもそうすること自体が、自分の満足であるようにやった。」(傍点筆者)

石井は、姉につれられて女学校の寄宿舎にいき、そこで会ったS先生のことを子ども心に「中に熱いものをもっている人のような感じをうけた」と書き、教授夫人となつてかなりの年月を経たのち、若い恋人ができて教授夫人の座を捨てたS先生のその後を記して、「私は、先生のなかにある燃える何ものかを感じた。幼い時の勘というものは案外正確なものなのではあるまいかと考えた」とも書いています。

そして、これは、たぶん、ずっと後のことなのだろうが、生まれた時から家にいた「まあちゃん」の死について、石井はこんなふうに記している。「まあちゃんの死で、私は、母の死などとはまったくがった衝撃をうけた。母の死はかけがえのない人間の死だったが、まあちゃんのは、生まれたときから家の土に生えていた、古い木が倒れたような感じだった。」

『幼ものがたり』のおもしろさは、もちろん、よみがえった記憶の中身にもあるのだが、二度三度と読むうちに、私たちの視点は、幼時を生きる自分と出会う現在の石井の姿に移つていき、むしろ、こちらにこそ自分は惹かれていたのだということに気づかされる。

よみがえる記憶の一片一片にどう光をあて、ことばを与えるか。そこにはまぎれもない、現在の石井桃子その人の姿がある。かつての母親と自分の行為に、若きのもつ残酷さをよみとつているのも石井ならば、「いかにもそうすること自体が、自分の満足であるようにやった」祖父のことをそれと書かずにいらなかったのも石井である。そして、この文体の、ああ、何と

きっぱりと解放されていることだろう。

同じように石井は、はげしい恋に生きたS先生のことを書き、そして、「まあちゃん」の死をすでに引用したように書いた。「まあちゃん」とて、「かけがえのない人間なのに」などともつともらしいことはひとこともいわず、石井は自分にとってその死がどう感じられたかを、残酷なまでに率直にいつてのけている。

『幼ものがたり』で石井は幼時を生きる自分との出会いを語りながら、その実何より今の自分自身をはつとするほど正直に語っているのである。

家の中で馬の小便くさくなるからと、家のだれかが「伊勢屋」に正式に話しにいったエピソードなど、どうでもいいことにみえて、書かれてみると、おもしろい。おもしろいのは内容もだが、それをごくあたりまえのことにように、すまして書きそえる石井桃子がここにははつきりと見えるからで、こういうことを捨てずに書く人間というのは相当楽しい人ではあるまいかと、そこからさまざまな想像をかきたてられるからである。

ひしめきあうあでやかな花で、幼い石井に春を教えてくれた外便所わきのアズノ木や、ある農家の板塀のすそにこんもりと咲いていた幾群かのスミレ。(ほんとうに、スミレは時々こんなふう咲く!) 風呂場裏の溜池のまわりに季節がくるときまつのびてきた「目つぱじき」のこと。(そう、私もまた、どぶのまわりにはえた「目つぱじき」で、そっくり同じ遊び

をした！）お盆の支度。（これも同じ！）桐の花とそのにおい……。四季折々の自然や風物を語るその筆の、なんとみずみずしく、のびやかなことだろう。

そして、また、ことばや氣持が相手に届かなかった時の子どもの悲しみ、とまどい。したり顔をして寄り添ってこようとする大人を、拒まないまでも、冷やかに見つめる子どもの目。小学校に入学してから字がすらすら読めるようになるまでの一時期の、死や神についてのきれぎれの思索、夢想。小さな盗み。石井はそうしたものを、よみがえった幼時の感覚もそのままに記し、さらに身内以外にも、幼い石井の中に入ってきた人びと、あるいは目の前をすぎていった人びとについても書きとめている。

『幼ものがたり』にうかがわれるもの、それは外界のもの、その自然に、人事に、いきいきと反応する生理のゆたかさであり、幼時を生きる自分を自らのうちによりみがえらせながら、同時にふつうに生きている人びとのドラマを自分のそれと同じ比重で見ている成熟した人間の目である。石井が「米を搗く家には、子どもがなかった」と書き、「……その人たちは、ある晩、「夜逃げ」をしていなくなった」と書き、あるいは、好きだったNちゃんのその後の消息を書き記すとき、それぞれはたしかにそのとおりなのだろうが（こうしたことはたしかに子どもの心のどこかにひっかかっている）、しかし、私はそこに、そうしたものを自分の世界の外にほうむり去らなかつた、あるいは一度はほうむり去ったかもしれないが、すくなくともこの回想